

聖書:列王記第二 6章24節～7章2節

説教:わが主、王よ。お救いください

はじめに

今日のところには、目をそむけたくなるような残酷なことが書かれています。どんなに食べ物がなくお腹が空いたとしても、人間としてやってはならないことがある。この母親は人間のくずだ。そんなふうと思う方もおられるでしょう。あるいは特に若い人たちであれば、こんなことが本当にあったのだろうかと思われられないかもしれません。しかし歴史を振り返ると、大飢饉の時や戦争の時、これと同じようなことがあって、決して珍しいことではなかったのです。なぜこんなことが起きてしまうのでしょうか。どこかの国が悪かったからとか、どこかの政治家が悪かったという説明はあるかもしれませんが。しかしそれでも納得できません。神は祈りを聞いてくださる、と言われているけれど、神は何をしておられたのか。神はなぜこんなひどいことになる前に止めようとなさらないのか。誰もがいさぐ疑問でしょう。聖書はなんと語っているのか。ともに耳を傾けてまいります。

1 包囲と飢饉

1) 食糧の欠乏

イスラエルのすぐ北隣にはアラムという国があります。そのアラムの王、ベン・ハダドはイスラエルに攻め入って、当時の首都であったサマリアを包囲します。サマリアの町は城壁で囲まれていて、敵が襲って来ても大丈夫なような造りになっています。こんな場合どうやって待ちを攻め落とすか。手荒なことはしない。町を包囲してじっと待つ。そうするとサマリアの町に蓄えていた食糧や水がだんだんなくなっていく、それに反比例してマーケットで売られている物の値段がどんどん上がっていく。そのことが25節後半にあります。「ろばの頭一つが銀八十シェケルで売られ、鳩の糞一カブの四分の一が銀五シェケルで売られるようになった。」ろばの頭も鳩の糞も、何の役にも立たないものですが、そんなものでさえ高い値段がつけられて売られていた。それだけ町には何もなくなってしまうということです。

2) 母親の叫び

そんなとき人間はどうなるか。ここに書かれているとおりに。これは私の想像ですが、おそらくこの母親は何人かの子どもがいたのではないかと

たとえば三人いたとします。そのうちの一人が衰弱して死にかけていた。他の二人の子どもを生き延びさせるために、こうするしかなかった。決して自分のお腹を満たそうとしてやったのではない。そう考える理由があります。26節。「イスラエルの王が城壁の上を通りかかると、一人の女が彼に叫んだ。『わが主、王よ。お救いください。』」

わが子を鍋で煮て食べるなど、人間として許されるはずがありません。だれだってわかっています。でも、そうしなければ生き延びることができない。そのはざまに立たされたとき、たましいが叫びます。「わが主、王よ。お救いください。」

救いを求める叫ぶような祈り。この祈りはどうなっていくのか。このさきをたどっていきます。

2 王とエリシャ

1) 粗布を着ていた

30節「王はこの女の言うことを聞くと、自分の衣を引き裂いた。彼は城壁の上を通っていたので、民が見ると、なんと、王は衣の下に粗布を着ていた。」

普通なら「お前はひどい母親だ」と厳しく非難してもおかしくない。ところがイスラエル王はそうはしないで、その代わりに自分の衣を引き裂きます。王でありながらこの国の人々を守ることができなかった、人々を悲惨な状況に追い込ませてしまった、そんなふうに自分の責任を痛感しています。

それだけではありません。30節後半。「民が見ると、なんと、王は衣の下に粗布を着ていた。」粗布は罪の悔い改めのしるしとして上から着るものです。ところがイスラエル王は、上着の下に身につけていましたから、明らかに人に見せびらそうということではない。真心から悔い改めの姿勢をとりながら、主に救いを求めていたのだらうと思うのです。

2) エリシャに向けられた怒り

ところがどうでしょうか。イスラエル王が城壁の上から見て聞かされたことは、主の救いではなく、恐ろしいような悲惨な現実でした。神は必ず救ってくださると期待していたのに、それが実現しないとわかったときどうなるか。皆さんも経験が

あるでしょう。まず最初はがっかりする。その次に今度は神に対して怒りが湧いてくる。33節で王の使者にこう語らせる。「見よ、これは主からのわざわいだ。これ以上、私は何を主に期待しなければならないのか。」

神に対する怒りは、次に実際の預言者エリシャに向けられ、使いの者を送ってエリシャを殺そうとします。なぜそんなことをするのでしょう。エリシャがアラムのスパイだったのでしょうか。いいえ、そんなことはない。むしろ彼はイスラエルを助ける側にいた人なのです。なのにどうしてエリシャを殺したいほど恨むのか。

3) エリシャに期待していたのに

前回のところを振り返ってみましょう。アラムの軍隊がエリシャを殺そうとしてやってきたとき、エリシャは預言者としての力を発揮して兵士たちの目をくらまし、まるで借りてきた猫のように手なずけてサマリアに捕虜として連れて行きました。イスラエル王はそれを目の当たりにして、エリシャがどれほどすごい預言者であるかを知ります。そうしたらどうなるでしょう。何か困ったことが起きれば、エリシャが解決してくれる。そんな期待が生まれてくる。この戦争も、きっとエリシャはイスラエルを救ってくれるだろうと期待していた。粗布を身につけて悔い改めの姿勢を示し、万全の体制で救いを待った。ところがどこからも救いはやってきません。期待が裏切られたように感じたとき、激しい憎しみに転じ、やがて殺意にまで変わります。

これは決して他人事ではありません。願いがかなえられるようにと、私は神様のために悔い改めの祈りをしてきた。いや、それだけではない。私は願いをかなえてもらうためにこういうことも、ああいうことをした。ここまでのことから神さまはきっと願いをかなえてくれるに違いない。そんなことを考えたことはなかったでしょうか。願いがかなえられればよいのですが、願いがかなえられない場合がある。それどころか、もっとひどいことになってしまうこともある。そうなったとき、「どうして神は祈りに応えないのか」と怒りをぶつける。そういうことはなかったでしょうか。こんな場合、牧師からこう言われるでしょう。「祈りに応えてくださるかどうかが、それを決めるのは神です。かなえられないからと言って怒るのは筋違い。あなたの信仰が中途半端なのです。」そんなお説教をされてしまいます。そこで終われば、もっと立派な信仰者になりましょうというような単純な話になりますが、そうではない。続きがある。

3 神

1) 救い

7章1節。「エリシャは言った。「主のことばを聞きなさい。主はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。』」

城が包囲されている今は、目の玉が飛び出るほど食糧の値段が高騰している。しかし24時間後はどうなるか。上等の小麦粉一セア、およそ4キログラムが千円ほどになると言うのです。今の物価と比べても安い。それを聞いたイスラエル王の侍従はそんなことはありえないと鼻で笑って信じようとしません。エリシャの預言はどうなったのか。その先を読めば書いてあります。結論を言えば、不思議なことが起きて、イスラエルはアラムの手から救われていき、エリシャが語ったとおりになっていく。

これは何を現しているのか。イスラエル王は神に期待しながら、救いがないとわかると、神に対して強く失望し、エリシャに怒りの矛先を向けました。信仰ということから言えば、まことに中途半端でした。

2) 救いを求める叫びはどのようにして聞かれたのか

それなのにイスラエル王の祈りは聞かれませんでした。その結果、あの母親の叫びのような祈りが聞かれました。

こんなことを言うと、反論する方がいるでしょう。「そうではない。神はエリシャの信仰に答えてくださったのです。」もちろんそのとおりです。しかし、エリシャが動いたきっかけは何ですか。よく読んでください。エリシャが自ら進んで救いのわざをおこないましたか。そうではない。救いが始まったきっかけは、母親の救いを求める叫びが最初で、それを聞いたイスラエル王がエリシャを殺そうとして、その結果エリシャを通して救いのわざが行われた。そういう順番です。

3) たとえ中途半端な信仰であっても

なんと複雑な順番ですが、これはどういうことでしょうか。皆さんは思っていませんでしたか。立派な信仰者にならなければ。もちろんそうならばと願います。しかしいつも立派な信仰者でいられるか。神は何をしているのか、神は私を忘れたのか。神は祈りに応えてくださらない。いろんな不

満を覚えることはなかったでしょうか。誤解しないでいただきたい。神に対して不満を持つてはいけないと言おうとしているわけではありません。その反対です。あえて極端な言い方をします。神に対してどんどん不満をぶつけてよい。怒りをぶつけてもかまわない。「どうしてですか、なぜですか」と、胸元をつかんでゆさぶるような気持ちで訴えてもかまわない。私たちが神の所に行く動機はなんでもよい。とにかく神は待っておられるのです。感謝であるならそれはもちろんよいことですが、怒りをぶつけに行ってもよい。それで私たちの祈りとして聞いてくださる。

母親が自分の子どもの肉を食べなければならない。神がそれをご覧になって何も感じていないと思いますか。神だって悲しまないはずはないのです。だったら私たちだって、「どうしてですか、どうしてこんなことになるのですか」と神に怒りをぶつけるのは自然なことではないですか。

それとも神は悲しむだけで、何もなさらないのでしょうか。そんなはずはありません。こんな悲惨なことが二度と起きてはならない。人間の罪の残酷さがいつまでも続いてはならない。そのために神はご自分のひとり子を私たちのところに遣わし、ひとり子である方が私たちの罪の身代わりとなって、十字架で死んでくださいました。神は何もしていないわけではありません。すでにしてくださっている。すでに救いの道が備えられている。そこに目を留めながら歩んでまいります。